

論文の内容の要旨

論文題目 命令幻聴への服従行動に影響する認知的要因

氏名 古村健

1. 背景と目的

命令幻聴は、「何かをするように言われる言語性幻聴」と定義されている (Hellerstein et al.,1987)。伝統的な精神医学においては、命令幻聴にはあらがえない力があり、無視することができないために自傷他害の恐れが高いと考えられてきた (Bleuler,1924)。統合失調症の陽性症状への認知行動療法の有効性はいくつもの無作為化比較試験で明らかにされている (Wykes et al.,2008) が、命令幻聴への服従行動に対しては介入が難しいといわれている (Birchwood et al.,2011)。

Brahamら (2004) は、1990年～2000年の実証研究をレビューし、命令幻聴はそれ単独で服従行動を生じさせるのではなく、幻聴についての認知が媒介変数になっていると指摘した。BarrowcliffとHaddock (2006) は2005年までの研究をレビューし、服従行動の予測には、命令内容と幻聴についての認知の両面のアセスメントが必要だと結論づけた。しかし、命令幻聴への服従行動が生じる主たるメカニズムは不明である。

本論文では、社会的に問題となる危険な命令幻聴への服従行動を予測し、制御するための示唆を得るために、命令幻聴への服従行動に影響する認知的要因を明らかにすることを目的とした。なお、本論文では命令幻聴の心理学的な発生メカニズム (たとえば, Waters et al., 2012 ; Badcock & Hugdahl,2012) については言及しない。

2. 本論文の構成

本論文は大きく3つの研究で構成されている。第1章は本邦の研究も含めた文献研究である。命令幻聴の体験率を明らかにした上で、命令幻聴への服従率、そして命令幻聴への服従行動に影響する認知的要因と課題を明らかにした。第2章は、研究3の準備として否定的評価信念を測定する尺度の開発を行った。第3章では、持続性幻聴をもつ統合失調症患者の調査研究を行った。幻聴の内容と形式、幻聴についての認知、一般的特性の各要素と、服従行動との関連性を検討した。この3つの研究を通して、命令幻聴への服従行動を予測し、制御するための認知的要因を明らかにした。

3. 各研究の方法と結果

第1章では先行研究を網羅的に概観した。研究対象は統合失調症患者が多数を占めていた。17編のうち、精神科患者を対象とした研究が8編、幻聴体験者を対象とした研究が9編であった。これらの論文を概観し、精神科患者のうち、幻聴体験者は約6割で、命令幻聴体験者はその半数の3割にみられることを明らかにした。

命令幻聴への服従行動の割合（服従率）は17編から算出できた。命令幻聴への服従行動の調査は、その研究目的によって服従行動の操作的定義が異なり、服従率の幅は0～91.7%と非常に広がった。そこで先行研究の服従行動の定義を詳細に検討した結果、危険な命令幻聴に対する服従率は、服従行動の有無と服従頻度のいずれかに基づき算出されており、それぞれさらに2つの測定方法に分類することで、結果の解釈が容易になった。まず、危険な命令幻聴体験者の約7割の人が服従経験をもっていた。つぎに、ある個人が危険な命令幻聴を体験している場合に、服従する割合は約2割であった。最後に、危険な命令幻聴に頻繁に服従する傾向をもつ人は約2割であった。

命令幻聴への服従行動に影響する要因を検討した研究は12編であった。服従行動に影響する要因を「幻聴の内容と形式」「幻聴についての認知」「一般的特性」に分類し、先行研究の知見と課題を明らかにした。

命令幻聴への服従行動に影響する要因は、(1) 命令内容の危険性 (Junginger,1990)、(2) 幻聴の「正体」についての認知 (Junginger,1995)、(3) 幻聴の意図を「善意」(Beck-Sander et al.,1997) や「悪意」(Barrowcliff & Haddock,2010) と認知すること。(4) 幻聴の全能性を認知すること (Trower et al.,2004)。(5) 否定的評価信念をもっていること (Fox et al.,2004) が挙げられた。

第2章では、服従行動に影響する認知的要因のひとつとして注目される否定的評価信念を測定する尺度である **Evaluative Beliefs Scale** (Chadwick et al.,1999) の日本語版を開発した。大学生と社会人を対象に大規模調査を実施し、信頼性と妥当性の高い尺度を開発した。特に、否定的評価信念は、否定的感情に影響を与えるものであり、認知モデルに基づく調査研究に利用価値が高いことが確認された。

第3章では、持続性幻聴を体験している統合失調症患者を対象に横断調査を実施し、命

命令幻聴への服従行動に影響する認知的要因を検証した。先行研究では、幻聴の形式の測定方法に課題があったため、幻聴評価尺度として定量的な測定尺度の日本語版を開発した。その結果、幻聴の「明瞭性」が服従行動に影響を与えていることを明らかにした。さらに、幻聴の認知行動モデルに基づく幻聴についての認知を測定する標準的な尺度（Beliefs About Voices Questionnaire-Revised ; Chadwick et al.,2000）を用いて、幻聴の全能性が服従行動に影響していることを明らかにした。そして、第 2 章で開発した否定的評価信念尺度を用いて、否定的自己評価信念が、幻聴の明瞭性と全能性の両者に影響を与えていることを明らかにした。これらの 3 要因が服従行動の予測要因であると考えられた。また、これらの各要因を標的とした多様なアプローチが命令幻聴への服従行動の制御に寄与すると考えられる。

4. 本研究の意義と臨床的示唆

1) 命令幻聴への服従行動に関する文献研究

本研究では、命令幻聴の出現率、命令幻聴への服従率といった基礎データを文献研究から明らかにした。エビデンスに基づく医療が提唱されるようになり（古川, 2000）、幅広く状況を観察し、その中から問題を明らかにするようなパラダイムが臨床家にも必要とされる時代になっている。しかしながら、日本においては命令幻聴への服従行動に関する実証研究が皆無に等しかった。文献研究によって、日本の現状と問題を明らかにした意義は大きい。

命令幻聴の出現率のレビューは、Shawyer ら（2003）以後に、網羅的に実施されていなかったため、それ以後の 10 年間の調査研究を含めて検証できたことは日本だけではなく、この領域にかかわる状況を確認する上で意義があった。

命令幻聴への服従行動のレビューでは、先行研究の問題点を乗り越えた点が本研究の意義である。これまでは服従率が多様であるという曖昧模糊とした状況にあった。今回は服従率を算出する方法を整理することで、服従率の結果に一貫性があることがわかった。このような点は、網羅的なレビューを行わなければ明らかに出来なかったことである。

命令幻聴への服従行動に影響する要因の網羅的文献レビューは、Barrowcliff と Haddock（2006）以来のレビューであった。近年の発展状況を明らかにする一方で、いまだ結論の出していない点を明らかにすることができた点に意義がある。また、先に指摘した服従率の算出方法の問題点を解決した上で、服従行動に影響する要因の検証に進むことができた。先行研究では多様な要因が関連しているなかで、調査方法に不備があったために十分な結論に至っていないということが明らかにできた。

2) 尺度開発研究

本論文では以下の 2 つの尺度の日本語版を開発した。

■ Evaluative Beliefs Scale (Chadwick et al.,1999)

否定的評価信念は、自己や他者に関する評価信念であり、多くの尺度が開発されている。

しかし、「他者→自己」という方向性を明確に区切り、そして自律と愛着に関するテーマに絞り、認知的要因だけを測定するための尺度はこれまでには見当たらなかった。**Evaluative Beliefs Scale** は、この点に独自性があった。この尺度は、不安、うつ、怒りといった一般的な否定的感情と関連した認知を拾い出す上で有用であるだけでなく、今回の研究で使ったように精神病性症状を有する対象から健常者まで幅広く使用できる点に強みがある。このような強みをもった尺度を開発したことは意義が大きい。

■ Hamilton Program for Schizophrenia Voices Questionnaire (van Lieshout & Goldberg , 2007)

幻聴重症度評価尺度を開発した意義は、日本においては非常に大きい。日本においては、残念ながら幻聴に対する認知行動的アプローチは初期段階にある。その背景には、幻聴に関するアセスメントツールが不足しており、実証調査研究に至らないということが考えられる。自己記入式尺度は、被験者の知的水準の低さや病状の重さによって使用が困難となりやすい。しかし本尺度は、重度の持続性幻聴体験者が短時間で記入でき、侵襲性も少ない形式的側面を測定する尺度である。このツールを糸口として、患者とのラポールが形成され、安全に幻聴体験を扱うことが可能となる。また、この尺度は言語性幻聴の主観的な媒介変数を定量的に表す効果的な方法となり、患者の経過をモニタリングしたり、治療的介入をガイドしたりするなど多様な臨床状況のニーズに応える可能性が高い。このような有用なツールの開発も本研究の意義である。

3) 命令幻聴への服従行動の認知的要因のモデル作成の意義

本論文で最も意義が大きいのは、やはり命令幻聴への服従行動に影響する認知的要因をモデル化したことにある。すなわち、幻聴の明瞭性、幻聴の全能性の認知、否定的自己評価が服従行動を予測する上で有用な情報をもたらすと考えられる。これは精神医学および臨床心理学領域において治療標的を定めたという意味で重要な知見を提出したと考えられる。

全能性の認知へのアプローチは、幻聴に特化した認知行動療法が選択される。**Chadwick**ら(1996)のアプローチは命令幻聴への認知行動療法の基礎となろう。ここから発展した命令幻聴への認知行動療法(**Trower et al.,2004**)は、一定の効果が期待できる。今後さらに実践を重ね、より有効なアプローチに発展させていくことが目標となろう。

否定的自己評価へのアプローチとしては、うつや不安に対する一般的な認知行動療法が有効性を示しうる。**Trower**ら(2011)の認知行動カウンセリングでは、特に否定的自己評価へのアプローチに重点を置いており、効果が期待されるであろう。

本研究で明らかにした3つの認知的要因への治療的アプローチは他にも考えうる。今後は有効な臨床介入に向けた実験的介入研究が期待される。